Japanese Council of Science Museums Newsletter Vol.31. No.1

全科協ニュース

URL http://jcsm. kahaku. go. jp

全国科学博物館協議会　東京都台東区上野公園　国立科学博物館　〒110-8718　Tel.5814-9857・9858　Fax.5814-9898　平成13年1月1日発行（通巻第176号）

特集　観光地の博物館

伊勢まちかど博物館

伊勢市企画課　西川　貴也

「伊勢に行きたい、伊勢路が見たい。せめて一生に一度でも」と伊勢音頭に謳われ、全国津々浦々から庶民の憧憬を集めた伊勢のまち。

温暖な気候と美しい景色が古(いにしえ)の人々に「傍国(かたくに)の可怜(うま)し国なり」と賞賛せしめ、神宮を鎮座させたというエピソードがまことしやかに思える当地は、今もなお、日本人のこころのふるさととして、『癒し』と『やすらぎ』をあたえる現代の理想郷である。

伊勢の地が古来、人、もの、情報の集散地であり、賑わいをみせてきたのは神宮鎮座に因るところが大きく、国際観光都市として、今なお、たくさんの来訪者があるのは、神宮をはじめとする歴史・文化資産、伊勢志摩の自然資源に求心力があるためであろう。

しかしながら、幕末、「おかげまいり」に代表されるような庶民の参宮ブームを引き起こし、今も日本人の心の奥底に伊勢参宮というDNAを植え付けた仕掛け人がいたことは余り知られていない。

参宮は、皇族のみが行っていたのが平安末期あたりから少しずつ緩み、武士階級に広がり、庶民に門戸が開かれるまでには相当の期間を要したようである。

しかし、レジャーというものが存在しない封建時代、福利厚生制度も公共交通網もない時代に、何が生命の危険を課してまでも未だ見ぬ遠国へ駆り立てたのであろうか。

その仕掛け人こそが、神宮の下級神官であり、御師(おんし)とよばれた人達であった。彼らは、現代のツアーコンダクターと旅館業を兼ねた仕事を行い、伊勢暦、大麻などを持ち地方を訪ね、村々に講を作り、その積み立てた金で何年かに一度村の代表が参宮する制度を確立した。日々の生活に追われる時代にひと月以上の時間と莫大な（庶民感覚では）費用をかけて信仰という名の物見遊山に出かけられるのだから、抑圧された庶民層に受け入れられないわけがない。この大ヒットしたシステムこそ『伊勢講』として全国各地に名残をのこす制度である。

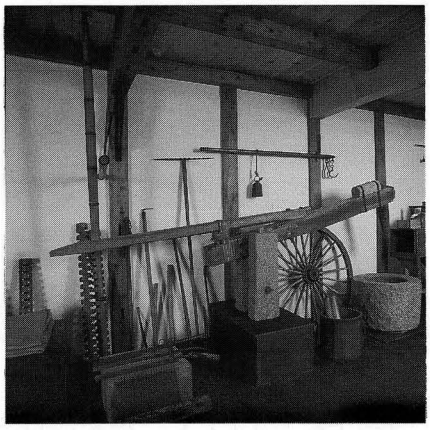
地域（神宮）の情報を発信し、集客交流によりまちづくりを行う、本市のまちづくりの骨格を創り上げた先駆者に習い、平成の世に、伊勢のことをもっと知ってもらおう、もっと楽しんでもらおうと、様々な試みを行っているのが平成元年3月に設立された『ザ伊勢講』（設立時は、ザ伊勢講受入協議会）である。

この地域づくり団体は、市内の商工会議所青年部、観光協会青年部、建築士会青年部、JCのメンバーから構成され、平成4年から6年にかけて連続して開催される世界タートルマラソン伊勢大会、第61回式年遷宮、世界祝祭博覧会の3大イベントに向け、伊勢の地域おこし、情報発信を行うことを目的に結成された。その活動は、伊勢路の心象風景を題材にした『伊勢講カレンダー』の発行、神宮の所管社125社や文化財を巡る『125社の旅』、外宮・内宮の鳥居前町に残る『世古』の研究などを行っている。

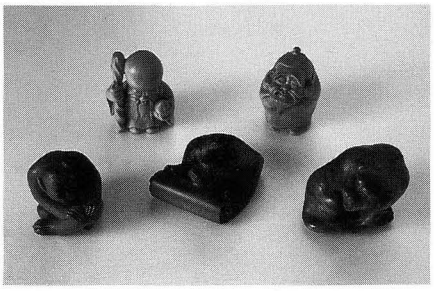
『伊勢講カレンダー』は、毎年テーマを変え、テーマにふさわしい伊勢志摩の風景を提供し、近年では、伊勢に因んだ和歌や俳句を掲載するなど趣向を凝らしており、根強いファン層を摑んでいる。

また、『125社めぐり』は、私鉄とのタイアップ、折からの健康志向ブームと相まって大ブームを引き起こし、初回100人強であった参加者が、最大1,000人を超える盛況をみせ、遠くは信州、中国地方からの参加者が出るほどであった。

伊勢とっくり館



かどや民具館



伊勢根付彫刻館

このような地域活動とともに発足させた事業に『まちかど博物館』がある。神宮とともに歩んできたまちの資料館として、本市には、神宮徴古館（ちょうこかん）、市立郷土資料館などがあり、市民や来訪者に郷土の歩みを教えてくれているが、もっと庶民生活に近い、市民による、市民のための、草の根の文化拠点つくりをめざしてはじまったものである。

伊勢まちかど博物館とは、「誰でもちょっとした場所さえあれば、自分の好きなものや誇れるもの、楽しみをもとに博物館の一つくらい作れる」を基本テーマに始まっている。

昔からお伊勢参りの旅人をもてなしてきた伊勢のまちには、今も街角のあちこちに伝統や文化が息づいており、庶民の暮らしを伝える個人のコレクションや地場産業の工房など、地域も伊勢から二見へと広がり、現在30館近いまちかど博物館が公開されている。

そこでしか見られない伊勢の生きた文化を生粋の伊勢っこたちが紹介し、急ぎ旅では味わえない、素顔の伊勢に出会える。どんなものがあるかというと、①個人が長年かけて収集したもの、②非営利のもの、③一貫性のあるものといったコレクション。

伝統工芸（地場産業）では、①伊勢の地域に根ざし、歴史、伝統、文化性の高いもの、②製造過程のみられるもの。

モデルショップでは、①伊勢の伝統に根ざし、めずらしいもの、貴重なものを展示しているところ、②商品知識が豊富で、まちかど博物館の学芸員にふさわしい人のいるところ、③伊勢の文化の香りのするお店。

建物では、①伊勢独自の建築様式を有し、内部が見学できるもの、②昔ながらのしつらえを残しているもの。

人物では、①地域の歴史、文化に精通し、ガイドができる人、②この活動に興味を持ち、時間的に協力できる人。などなど様々な分野領域にわたっている。

内容を少し紹介すれば、バロック（変形）真珠のギャラリーもあれば、とっくりや錦絵を収集したお店もある。かと思えば提灯づくりのお店もあり、建物自体が非常に貴重でなおかつ古い逸品を保存している旅館まで、庶民のお宝が伊勢のまちには散在している。

同様の制度は、東京都墨田区などにおいても展開されているが、伊勢市のまちかど博物館はこれらのものと違い、行政による支援を一切受けていない。自宅・事業所の一部を公開する各博物館はもちろんのこと、博物館制度を企画・運営しているザ伊勢講自体も一切の援助を受けていない。いわゆる、自主自立をモットーに事業展開を行っている。

このような博物館をガイドブックに掲載し、時間をかけて伊勢のまちを楽しみ、その過程で新しい発見があれば、来訪者はきっと伊勢のまちに足を運んでくれるに違いない。

近年、三重県がザ伊勢講のまちかど博物館制度を真似て、名前まで同じ制度を始めたが他地域とのネットワークを図り、三重県全体にまちかど博物館が普及すれば本事業を始めた甲斐があったというものである。心許ない一握りの人たちによる展示物の盗難、時間不問の訪問などまちかど博物館を巡る逆風もないではないが、このような地道な運営こそが伊勢のまちづくりの礎を為していると言えなくもない。

たくさんの史跡など文化資産に溢れる伊勢のまちは、まるで、おもちゃ箱のようであり、一度は訪ねてみる価値のある地である。自分の足で訪ねるまちかど博物館巡りが、旅の本質と伊勢の魅力を貴方に教えてくれることに疑念を挟まない。

まちかど博物館の問合先
ザ伊勢講事務局
TEL 0596-24-3715

阿蘇火山博物館

池辺　伸一郎

1．はじめに

阿蘇地域には年間1300万人の観光客が訪れている（熊本県商工観光労働部、1999、熊本県観光統計表）。そのうち約200万人が阿蘇山上（中岳火口～草千里ケ浜一帯）を訪れている。平成12年4月には阿蘇山上へ通じる県営の有料道路が無料化され、そのことによって阿蘇山上を訪れる人数は増加しているものと考えられる。

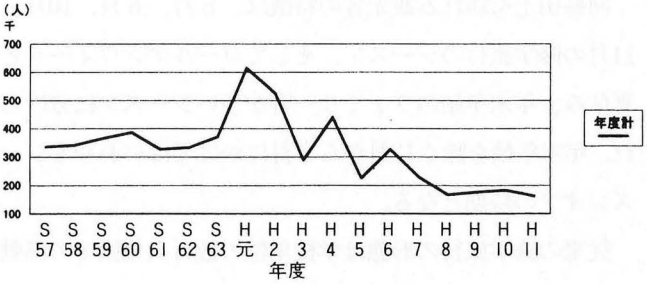
一方、阿蘇火山博物館は昭和57(1982)年、草千里ケ浜に開設された。設置母体は九州産業交通株式会社というバス運行を主体とする民間企業である。設置の主な目的は阿蘇くじゅう国立公園におけるビジターセンター的役割を果たすため、さらには従来からの「火口観光」に頼ってきた阿蘇において、悪天候時や火山活動が活発で火口に近づくことができない時期においても観光客を受け入れる施設が必要との認識からであった。

本稿ではこの大きな観光地に立地する「阿蘇火山博物館」の運営においての利点や問題点、それを踏まえた上での活動や運営上の工夫などについて紹介する。

2．博物館の内容

火山博物館の概要を以下に紹介する。1階はエントランスホールで売店、レストラン、ミュージアムショップ、オルゴール館などを併設する。2階の展示フロアは阿蘇の地形地質や火山活動についてのものが中心で、阿蘇の動植物、歴史、民俗等についても展示している。展示の中心は”火口カメラ”によって活動中の火口内を生中継するコーナー

阿蘇火山博物館外観



入館者数の推移

である。また、3階の映写ホールでは約15分間の映画上映を行い、阿蘇の自然や民俗行事などについて大型画面で紹介している。映写ホールの収容人数は約350人である。

開館から18年余りが経過するが、年間の利用者数は平成元年の65万人をピークに増減はあるもののここ数年は20万人を下回る状態にまで減少している。

3．観光地に立地する博物館

観光地に立地する博物館としては、入館客の特徴として以下のことがあげられる。

・観光客が95%以上を占める
・修学旅行生が全体の50%以上を占める
・地元（特に阿蘇郡内）からの来館者が少ない

観光客の動向の特徴としては以下のとおりである。

・15分間の映画はよく見るが展示内容の難しい部分はあまり見ない。

つまり、普通の一般の観光客は“その土地の博物館”を目指してくるわけではなく、観光地阿蘇を訪れることが大きな目的であり、その流れの中で（時間に余裕がある、天気が悪く外の散策ができない、火口見物ができない等の理由により）博物館にでもいってみようか……といった動機で入館する人が多いと感じている。また修学旅行などの団体客ははじめからコースに組んでいるところもあるが、これは旅行エージェントの担当者或いは学校の担当の先生に博物館を見せたいという意識を持った人がいる場合である。多くの場合は、基本的には中岳の火口見物をコースに組んでいるが、天候の状況や火山活動、火山ガスの流れ込み等

によって火口への立ち入りが規制された場合の“代替手段”として博物館利用というケースが多い。

4．観光客の動向の変化

阿蘇山上を訪れる観光客の特徴は、5月、6月、10月、11月の修学旅行のシーズン、そしてゴールデンウィークと夏休み、年末年始のファミリー客が多いシーズンに分けられ、年末年始を除く12月から2月にかけてはいわゆるシーズンオフの時期となる。

従来の修学旅行の形態は学校単位の数百人規模での移動が中心であったが、近年では「総合的学習の時間」の設定の影響により、クラス単位或いは班別行動がかなり目立つようになってきた。これに伴い、館内を自由に見学するのでなく事前学習したことに対する質問を受けてほしいとか、博物館周辺のフィールドも含めて案内してほしいといった要望が増えてきているのが実状である。

また中高年の20～30人程度の方々の“自然体験”ツアーも増えてきており、これに対する案内の要望も増加傾向である。

一方、ファミリー客についてはそれほど目立った変化は見られない。

近年の観光客の全体的な傾向としては、

・周辺に様々な観光施設が開設されていることによって観光客の分散傾向が見られること
・少子化の影響で修学旅行の絶対数が減少していること
・時期的にも分散傾向が見られること

などがあげられる。

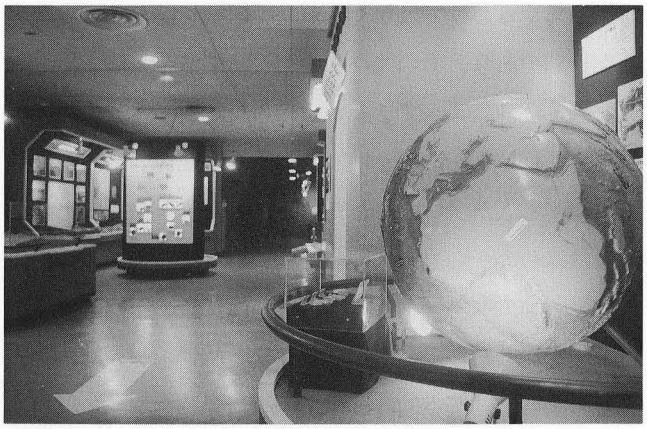
次に、博物館としての入館者数の増減の要素としては次の事柄があげられる。

・長期的な減少傾向は展示更新の遅れや施設の老朽化による影響が大きい。
・1年のうちでは当然のことながらシーズン期とオフ期によって変化する。
・日々の入館者数については、火口観光の可否の影響が大きい。つまり、天候の良し悪し、風向きによって火山ガスが観光客のいる展望台に流れてくるか否かによって刻々と火口への立入規制の実施、解除が繰り返されており、規制のない時には多くの観光客は火口見物に行き、規制時には博物館を訪れるという傾向が開館以来続いている。火口立入規制時とそれがない時間帯における入館者数はシーズンにもよるが、2倍以上の違いがある。

5．今後の阿蘇火山博物館の役割と取り組み

これまで述べてきたように、観光地にある博物館としてはこれまでの観光客のニーズに応えつつ近年の一般客や学校関係の団体客の要望に添った受け入れについて考えて行かねばならないと考えている。

従来の観光客のニーズからは、“勉強をする”といった固いイメージを少なくし、アミューズメント性を重視した展示やイベントなどの企画をつくる必要があったが、これからの観光客のニーズとして「ものから心の時代へ」といわれるとおり、阿蘇の持つ自然遺産をはじめ歴史や文化についてより具体的にわかりやすく取り上げ、様々な手法で情報を提供して行くことが必要だと感じている。また人の生活に関わる部分での捉え方を重視し、自然や文化と分けることなく、それらをミックスさせながら人々の生活にどう関わり、影響しているのかを見つめていく必要があると考える。



博物館内展示室

学びの館ネットワークによるワークショップ

具体的には３年前から阿蘇地域の10の文化施設をネットワーク化し、それぞれの施設が持つテーマを持ち寄ることによって「阿蘇学」を深めることができるのではないかとの思いから、活動を進めている。これまでに年１回のシンポジウムや数回の持ち回りでのワークショップの実施をはじめ、有料施設の特割セット券（学びチケット／通常の半額近く）の販売、文化施設を組み込んだフィールドワークコースなどを作成し、学校関係者や旅行エージェントへ提案するなどの活動を行ってきた。これは観光客や学校関係はもとより阿蘇周辺の地元の人々にももっと阿蘇をよく知ってほしいという思いからの活動でもある。

また現在、九州地域の４つの博物館とともに文部省からの委託事業「九州地域ネットワーク事業推進協議会」に参加し、学校との遠隔授業を中心とした活動を進めているところである。

６．まとめ

以上、観光地に立地する博物館としてその利用対象をこれまでは観光客のみに考えてきたが、今後は観光客のニーズの変化や学校の学習指導要領の変化にともなって、学校や地元の人々とも十分な情報のやりとりをしながら、地元からも支えられる博物館として活動を展開していかねばならないと考えている。

つまり、観光地の特徴である「他に行くところがないから博物館にでもいこうか……」といった消極的動機による利用者から、博物館を阿蘇観光や学習、地元を見つめ直すなどの目的の一つとして考えてもらえるような積極的動機を持った利用者を増やしていくことを目指していきたい。

三菱みなとみらい技術館

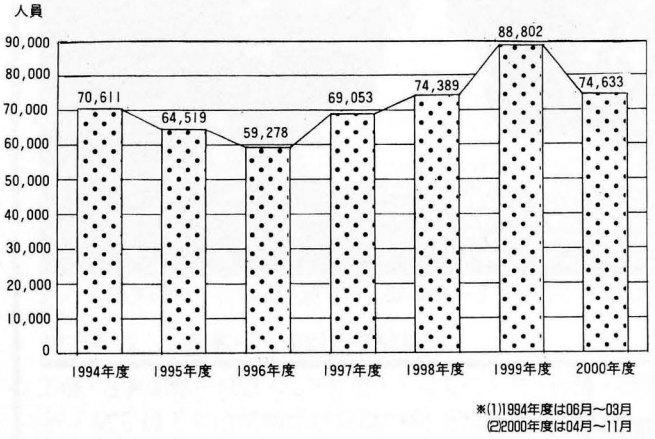
岩本　久美子

国際文化情報都市、観光都市として発展を続けている横浜の「みなとみらい21」地区（以下MM21地区）。1994年、三菱重工業は新しい技術開発の拠点をこの地に設置し、これを機に、地域に集う人々とのコミュニケーションを深め、子どもたちが科学技術に触れ夢を膨らませることのできる場として「三菱みなとみらい技術館」を開設した。

館内は、日常生活では接する機会の少ない科学技術を6つのテーマに分け紹介している。1階は「環境」、「宇宙」、「海洋」、「建設」、2階に「エネルギー」、「身近な技術の知恵と工夫」という構成になっており、それぞれ実機や模型、パネル、パソコンを使ったクイズ、ビデオ映像等の展示を通して科学技術の素晴らしさを実感してもらうことを目標としている。その他、ヘリコプターの操縦シミュレーションや、船や航空機を設計するコンピューター等、アミューズメント性の高いコーナーも設け楽しみながら科学技術を学んでいただける。

入館者数は、開館7年目を迎えた2000年に50万人を達成した。開館の年、94年度の入館者数は約7万人、その後2年間は約6万人に減少、97年度から増加しはじめ、99年度には約9万人となり、2000年度も増加の傾向にある。（グラフ1参照）

横浜は国内第2位の人口を抱える大都市である。その中でもMM21地区は横浜市の中心部に位置しており、自立した国際文化都市を目指し街づくりを推進している。1983年の都市開発着手以来、文化施設、国際会議センター、大型ホテル、大型ショッピングモールの出現で連日賑わいをみせている。今や地区内の進出企業は800社を超え、4万8,000人以上の就業者を擁する街となり、年間約3,500万人の人々が訪れている。



年度別入館者の推移（1994年06月～2000年11月）

観光の中心には、世界最大級を誇る観覧車のあるよこはまコスモワールド、日本一の超高層複合ビル・横浜ランドマークタワー等がある。これらのスポット（ハードの面）で注目を集め観光客を呼び寄せる一方、様々なイベント（ソフトの面）を行っているのがMM21地区の特徴である。代表的なイベントとしては、みなとみらいフェスティバルがあり、フリーマーケット、ライブ、パフォーマンス、クイズラリー（施設をめぐりクイズに答えると抽選で海外旅行や豪華賞品が当たる）等を行っている。期間中、入館料が無料もしくは割引になる施設もあるので毎年この時期はお祭りムードにつつまれる。第3セクターである㈱みなとみらい21が開発を一手に担い、都市基盤整備に至るまで21世紀にふさわしい街づくりに積極的に取り組んでいる。

MM21地区がこうした観光地であるため、春・夏・冬休み、大型連休、祝日には地方からの観光客の多くが当館にも訪れる。「近くのホテルに泊まっているので来た」、「ガイドブックに載っていたので来た」というお客様の声をよく耳にする。入館者数の約3分の1を占める団体客が観光地MM21を目指して来ている人々である。

その流れを活用して当館では、数年前よりダイレクトメールの発送を積極的に行っている。送付先は主に、①学校、②旅行会社、③近県ホテル、④全国科学館である。年に2回開催する特別展示のお知らせ（3月・7月）と、年末に翌年の営業カレンダーを、パンフレットや予約申込み用紙とともに送付している。

①の学校への送付は、関東地方の小学校、インターナショナルスクール、関東・東北・北陸・関西地方の中学校、全国の高校、高等専門学校へ送付している。小学校は主に遠足や校外体験学習、中学・高校は修学旅行のコースにご利用いただくことが多い。また、小・中学校の学校行事でのご利用は事前予約をすると無料、高校生は割引

で見学していただけるのだが、なかなか周知されず、このことを知っていただくためにも送付している。

②の旅行会社は、団体客を連れてきていただけることから、(学校も含む。学校団体は旅行会社を介して予約をとるところと直接学校側が予約をとるケースがある。)全国の主要会社に送付している。

③の近県ホテルは、宿泊観光客への宣伝、④全国科学館へは、相互の情報交換を含み、新たな客層の確保を目的としている。

ダイレクトメールの発送はとりたてて大きな工夫ではないが、目に見える効果としてはやはり入館者数が増加したことがあげられる。始めは主として学校団体の集客に力を入れ、中学校は来館履歴等を考慮して地域を拡大していった。高校・高等専門学校に関しては、当初はダイレクトメールを送付していなかったが、ここ1、2年で見学件数が増えたため追加した。これにより、学校団体の見学者数は明らかに増加した。さらに横浜市に関していえば、教育委員会を経由して当館のお知らせが各学校に届くように協力を仰いでいてこれも効果がある。

旅行会社は、毎年決まってお客様を連れてきてくださる会社が少しずつ増えたことから、より一層観光地横浜にきてもらえるよう全国的に送付を始めた。こちらも、結果が見え始め、これまで来館いただくことのなかった地域や客層の予約が増えてきた。例えば、PTAの団体などがあり、観光地である横浜を楽しんでいただく一方で、教育施設としての利用の視察を兼ねているようだ。

ダイレクトメールの発送のみが当館の集客方法ではないが、観光地であることの利点を活かし、確実に入館者数の増加を実感している。博物館への動員数が減少の傾向にある現在、毎年入館者数が増えていることは素晴らしいことだと他館よりいわれたこともある。

とはいえ、MM21地区を訪れる年間3,500万人のうちの7、8万人であることを考えるとさらなる工夫をすることによりもっとその恩恵を受けられるのかもしれない。MM21地区は現在、地区内を100円でまわるワンコインバスの運用や、将来的には横浜の他地域とを結ぶ地下鉄の開通を目前とし、ますます発展していくことが予想される。しかしながら、ショッピングモールやインポートマーケット、バーチャルリアリティなどのスポットは日本全国で作られており、今や大きな都市にはどこにでも存在するものである。いずれは飽きがきて人々が離れてしまうことも考えられる。

そこで、当館の今後の課題としては、①常に最先端情報の発信地であること／当館の主旨である。②ミュージアムショップ及びミュージアムレストランに独自性を持たせること／これだけのために訪れるというくらいのものにする。③観光客のみに頼らないリピーターの増加／友の会の活動や各種イベントを行っている④ポストシミュレーションの考案／シミュレーションはまだまだ人気だが、来館者による創造など本当の意味での参加型展示など。⑤横浜らしさの創出／現在は横浜ベイブリッジの模型展示など。あげれば終わりがない。博物館への動員数が減少化しているとはいえ、来館者の反応を見ていると学習への関心は決して低くはない。むしろ、当館の工作教室へ参加される方々は大変熱心である。結論としては、最も基本的なことであるが、何が望まれているのか来館者一人一人とのかかわりを考えていくことが大切である。本来博物館は楽しいところである。観光地にあろうとなかろうと、その自然な楽しさを伝えていき、人々の集う施設を目指したい。

吹き抜けのエントランスの様子

ジャイロの動きを楽しみながら体験

海外ニュース

安井亮・桜美林大学国際学部講師（博物館学）

イスタンブールで、2003年に新しい科学館が開館

2003年の開館をめざして、現在イスタンブールにある国立イーディズ工科大学のキャンパスで、同国にとっての初めての本格的な科学館『イスタンブール科学館』の建設が進められている。14,000m²の延べ面積を計画している同館では、550機以上の体験型展示装置を使って、科学のさまざまな原理が紹介されることになっている。立地場所は大学のキャンパスではあるが、広く一般社会に公開されることになっており、特に青少年による利用を重視している。Istanbul Science Center

米シェッド水族館、アマゾン川流域の生態を紹介した常設展をオープン

ジョン．G．シェッド水族館（シカゴ）で、このほど南米のアマゾン川流域の生態圏を紹介した常設展示をオープンした。新しく設けられた約1,000m²の展示スペースでは、アマゾン川流域に生息する250種類以上の動物の生態展示を見ることができる。同展では、珍しい動物を紹介するだけでなく、アマゾン川流域での熱帯雨林の伐採とダムの建設や鉱山から川に流れこむ鉱毒によってもたらされる地球規模の環境破壊にも重点を置いている。John G. Shedd Aquarium "Amazon Rising"

米バッケン図書館・博物館で、怪物・フランケンシュタインの物語が登場

フランケンシュタインは、言うまでもなく、『吸血鬼・ドラキュラ』と並ぶ、怪奇映画の古典中の古典と称される映画に登場する人造人間の通称である。（厳密の意味では、死体からこの怪物をつくった外科医ビクトル・フランケンシュタイン男爵の姓ではあるが）その原作をモチーフにし、19世紀の電気と化学を紹介することを目的とした常設展示が、アメリカの代表的な医学博物館である『バッケン図書館・博物館』（ミネソタ州ミネアポリス）に、2000年10月14日にオープンした。『フランケンシュタイン：メアリー・シェリーの夢』(Frankenstein: Mary Sherry's Dream)と題した、この常設展示コーナーでは、怪奇小説の古典である原作『フランケンシュタイン』で登場する19世紀の世界にタイムトリップした構成になっており、1818年に発表された原作者のメアリー．W．シェリーの書斎と、原作の中で登場するこの人造人間が生まれた実験室を忠実に再現した部屋が設けられている。この展示に併せて、19世紀の科学を体験できる実験プログラムが用意され、また怪物を生んだ原作者シェリーを、一人の役者による「一人芝居」で、演じた劇も上演されている。なお『バッケン図書館・博物館』は、心臓のペースメーカーを世界で初めて発明したアール・バッケンが創設した博物館であり、1975年の設立以来、現代医学の発展に不可欠な電気の利用について紹介してきている。The Bakken Library and Museum

米フィールド博物館、シカゴ周辺のオンライン植物図鑑に着手

現在フィールド博物館（シカゴ）では、シカゴ植物園とモートン植物園の協力を得て、シカゴ周辺の植物をインターネットで紹介するオンライン植物園図鑑を制作している。このプロジェクトは、連邦政府の博物館支援機関であるIMLS（Institute Museum & Library Services）から、約42万ドルの助成を受けており、2001年夏の公開が予定されている。The Field Museum

米ミシガン大自然史博物館、五大湖周辺の自然史データベースを制作中

現在ミシガン大学自然史博物館（ミシガン州アナーバー）では、同大学の図書館の協力を得て、五大湖周辺の植物と動物に関する収蔵品のデータベース化を進めている。IMLSから、約24万ドルの助成を受けており、2001年夏にはインターネットで検索が可能になる予定だ。University of Michigan Natural History Museum

米シカゴ植物園、シカゴ周辺の絶滅の危機に瀕した植物のデータベースを制作中

現在シカゴ植物園（イリノイ州グレンコー）では、イリノイ大学図書館とイリノイ州植物保護センターの協力を得て、シカゴ周辺の絶滅の危機に瀕した植物のデータベース化を進めている。IMLSから、約25万ドルの助成を受けており、2001年夏に完成する予定だ。Chicago Botanical Garden

米イサカの科学館で、数学に関する企画展を開催中

ニューヨーク州イサカにある科学館『サイエンセンター』(Sciencenter) では、数学の企画展を開催している。家族づれの来館者を主要な対象者としており、数の勘定、計測と図表化をハンズオン展示で紹介している。同展は、2001

年の夏からは、全米科学基金(NSF)からの助成を受けて、全国各地の科学館で開催されることになっている。"Fun, 2,3,4: All About a Number of Things!"

カナダ科学技術博物館、カヌーの企画展を開催中

カヌーはカナダが世界で誇るアウトドアのレジャー・スポーツである。もともと北米の先住民族が樹木を使って作られ、狩猟や輸送を目的に長く使用されてきた手漕ぎの小型船だ。オタワにあるカナダ科学技術博物館では、現在カナダにおけるカヌーづくりの長い歴史を紹介した企画展を開催している。『Canoes: The Shape of Success』と題したこの企画展では、同館で収蔵しているカヌーの逸品、カヌーづくりに使われる材料、道具、技術が紹介されている。また、観覧者が自由にカヌーの設計ができるコンピュータも用意されている。同展は、2002年まで同館で開催し、その後、北米各地で開催される計画だ。Canada Science and Technology Museum

ボストン科学博物館、バーチャル水槽をオンライン化

ボストン科学博物館の館内で見られるバーチャル水槽の展示コーナー(約170m²)は、もともと経営難によって同館に吸収される前に、旧コンピュータ博物館で開発されたものだった。このコーナーでは、観覧者はコンピュータで作られた魚のデジタル・イメージがモニターの画面で泳ぐ姿を見ることができ、また観覧者自身がコンピュータを使って架空の魚をも作れるようになっている。今まで、来館者は同館に足を運んで、このコーナーを利用するしかなかったが、このほどインターネットを使って、館外からも利用できるようになった。利用者は、特別に用意されたホームページ(www.virtualfishtank.com)にアクセスすることによって、4匹の架空の魚が自由に設計でき、そして個々の利用者に用意されたパーソナル領域『パーソナル水槽』に放すか、あるいは、同館の共通のバーチャル水槽に放すこともできるようになった。共通のバーチャル水槽に自分がつくったサカナを放した利用者は、そのサカナの成長の記録や、どこで泳いでいるか等の報告を、電子メールで定期的に受けられるようになっている。

Museum of Science

新しいウェッブサイト

Ann Arbor Hands on Museum
Ann Arbor U.S.A. http://www.aahom.org
Aquarium of the Americas New Orleans U.S.A. http://www.auduboninstitute.org
Audubon Zoological Garden New Orleans U.S.A. http://www.auduboninstitute.org
Brooklyn Children's Museum
Brooklyn U.S.A. http://www.bchildmus.org
Buehler Challenger & Science Center
Paramus U.S.A. http://www.bcsc.org
Children's Museum of Memphis
Memphis U.S.A. http://www.cmom.com
Christa McAuliffe Planetarium
Concord U.S.A. http://www.cmp.state.nh.us
Cranbrook Institute of Science
Bloomfield Hills U.S.A. www.cranbrook.edu/institute/Evansville Museum of Arts & Science
Evansville U.S.A. http://www.emuseum.org
Goulandris Museum of Natural History
Iffissia Greece http://www.ekby.gr/
Hawk Mountain Sanctuary Association
Kempton U.S.A. http://www.hawkmountain.org
Holden Arboretum
Kirtland U.S.A. http://www.holdenarb.org
Lodestar
Albequerque U.S.A. http://lodestar.phys.unm.edu
Michigan Space Center Jackson U.S.A. http://www.jackson.cc.mi.us/Michigan_Space_Center
National Motorcycle Museum & Hall of Fame
Sturgis U.S.A. http://www.museum.sturgis-rally.com
Natural Science Center of Greensboro Greensboro U.S.A. www.greensboro.com/sciencecenter
New Mexico Museum of Natural History and Science
Albequerque U.S.A. www.nmmnh-abq.mus.nm.us/nmmnh/
North Museum of Natural History and Science
Lancaster U.S.A. www.fandm.edu/northmuseum/
Omaha Children's Museum
Omaha U.S.A. http://www.ocm.org

＊(やすい・りょう)　E-post:rgyasui@obirin.ac.jp

1月2月の特別展

札幌市青少年科学館

冬の特別展「工作大集合2001」　1月5日～18日

旭川市青少年科学館

「2001年　科学探検広場」　1月13日～14日

滝川市美術自然史館

「ふるさとを描こう
絵と写真によるわが街展」　12月5日～2月4日

牛の博物館

親子で楽しむ企画展2001
「ヘビと仲良しになろう!」　11月18日～1月21日

マリンピア松島水族館

特別展示「ハゼの王国―魅力いっぱいの魚―」
9月9日～3月11日

秋田県立博物館

特別展「おもしろ博物誌III」　12月2日～4月8日

秋田県立農業科学館

「洋ラン展」　1月30日～2月12日
「アマリリス展」　2月14日～3月4日

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

第1回市民コレクション展
「チョウの魅力をもとめて」　2月3日～25日

栃木県立日光自然博物館

「日光・公募写真展」　1月23日～2月28日

浦和市青少年宇宙科学館

「数学と遊ぼう―かたちと数のワンダーランド―」
12月15日～1月21日

埼玉県立自然史博物館

企画展「化石の世界」　12月23日～6月10日

千葉県立中央博物館

第8回千葉県立美術館・博物館合同企画展
「房総ロマン紀行―写真で見る産業・交通遺跡―」
1月24日～2月18日
生態園トピックス展「青葉の森のタヌキ」
1月30日～4月8日

交通博物館

写真で見る20世紀「日本の鉄道10大ニュース」展
11月23日～1月23日

国立科学博物館

企画展「気づかなかった、地球の不思議。―微小藻の世界・土壌の世界―」　12月5日～2月12日

NHK放送博物館

「愛宕山版画展」　1月4日～28日
「21世紀放送の未来図展」　1月30日～4月1日

機械産業記念館（TEPIA）

「新しい世紀を拓く～ITの活力～」　9月29日～3月16日

横浜こども科学館

企画展「おもしろ写真館」　11月3日～2月18日

東京農工大学工学部附属繊維博物館

「サークル作品展」　2月16日～22日

馬の博物館

テーマ展「馬の張子玩具」（仮称）　1月末～3月末

横須賀市自然・人文博物館

特別展「山を越え、海を渡り―彼方よりはこばれてきたもの―」
10月21日～3月25日

神奈川県立生命の星・地球博物館

特別展「ふしぎ大陸　南極展」　2月10日～3月25日（予定）

新潟県立自然科学館

写真展「ウォッチング　とやの潟の野鳥～水辺の四季を生きる鳥たち～」　12月16日～1月14日

富山市科学文化センター

第9回「私の身近な自然」展　1月18日～2月12日
写真展「自然から学ぶ」　2月18日～3月4日

岐阜県博物館

特別企画「いにしえの美濃と飛騨」　12月9日～1月14日

東海大学海洋科学博物館

特別展「干支の魚―巳―」　1月2日～15日

半田空の科学館

「2000年　自然の記録展」　2月3日～3月11日

あいち健康の森健康科学総合センター

「大！錯？覚▽展―体験しよう不思議な世界―」
12月23日～1月28日

トヨタ博物館

企画展「カー・オブ・ザ・センチュリー～選ばれたクルマたち～」　12月5日～1月21日
企画展「オープンカー」（仮題）　1月30日～4月8日

神宮徴古館農業館

新春企画展「絵でみる日本の歴史
第5回　江戸の文化と明治維新」　1月1日～3月4日

滋賀県立琵琶湖博物館

水族企画展示「琵琶湖と大陸をむすぶさかなたち」
10月21日～1月28日

神戸市立王子動物園　動物科学資料館

巳(み)年干支展「ヘビ・へび・蛇」　12月16日～2月13日
第33回「巳年」賀状版画コンクール作品展

1月2日から1月14日

倉敷市立自然史博物館

「しぜんくらしき賞作品展」　12月10日～2月28日

広島市こども文化科学館

「不思議がいっぱい科学の世界コンピュータの秘密と科学」
1月6、7日

「ネイチャーフォト・天体写真展～自然を楽しむ～」
12月9日～1月7日

「平成12年度広島少年少女発明クラブ作品展」
2月17日～2月24日

防府市青少年科学館

「野鳥展」　1月20日～2月18日

愛媛県総合科学博物館

館蔵品展「夢と科学のたどった道・20世紀」
12月9日～1月14日

福岡県青少年科学館

特別展「大宇宙展スペシャル」
～すばる望遠鏡とスペースツアーで宇宙へ招待～
2月24日～4月4日

展示更新

東京消防庁消防防災資料センター　消防博物館

[展示室名]

常設展示室　3階　現代の消防
　　4階　消防の変遷
　　5階　江戸の火消

[主なコーナー(新展示物)の名称]

江戸三大大火のコーナー(5階)

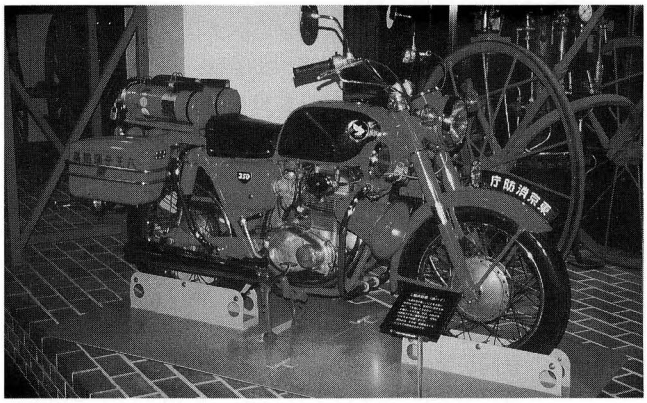
新展示物:「消防二輪車(赤バイ)」(4階)
　　「呼吸保護器具」(4階)

[オープンの期日]

平成12年10月17日

[準備期間] [担当業者] [総工費]

業者による工事は実施していない。



二輪消防車(赤バイ)

—全科協情報—

○ミュージアム・マネージメント研修について

趣旨:博物館の現状を幅広い観点から理解するとともに、博物館の管理・運営に関する専門的・実践的研修を行い、博物館の円滑適正な経営に資する。

主催:国立科学博物館、全国科学博物館協議会

後援:日本ミュージアム・マネージメント学会

協力:東京大学大学院教育学研究科

期間:平成13年2月19日(月)～23日(金)

会場:国立科学博物館(上野)、東京大学(本郷)

対象:自然科学系博物館等の管理部門職員など

募集人員:40人

申込締切:平成13年1月15日(月)

詳細は、国立科学博物館企画課研修係(電話:03-5814-9877　e-mail:nanbu@kahaku.go.jp)へお問い合わせください。

○ネットワーク活用研修会について

科学系博物館の諸情報をホームページで公開するために必要な手法や、館内ネットワーク管理に必要な技術等に関する研修会を実施します。

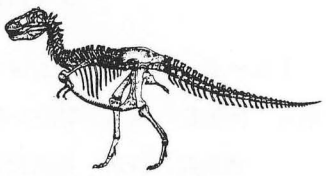
1. ホームページ活用研修【基礎コース】
　東京会場:平成13年2月7日(水)～9日(金)
　大阪会場:平成13年1月10日(水)～12日(金)
2. ホームページ活用研修【応用コース】
　東京会場:平成13年2月14日(水)～16日(金)
　大阪会場:平成13年1月17日(水)～19日(金)
3. ネットワーク管理研修【実務担当者コース】
　東京会場:平成13年2月20日(火)～21日(水)
　大阪会場:平成13年1月30日(火)～31日(水)

○海外科学系博物館視察研修について

平成12年度海外科学系博物館視察研修には、34名の方から参加申し込みいただきました。

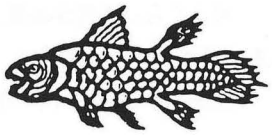
期　　間　平成13年1月14日(日)～1月27日(土)

※世界の化石・
鉱物・恐竜・化石
人類・動物骨格
標本及び模型の
輸入専門業者


ティラノサウルス・REX

株式会社 ゼネラル サイエンス
コーポレーション
〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802
TEL 03 (3583) 0731代表　FAX 03 (3584) 6247

美術
はく製



〈各種生物〉
剝製・骨格標本・レプリカ
加工／販売／リース

有限会社 東洋近代美術研究所
製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1
直通☎047-337-5678
☎047-337-5883
FAX 047-338-1978
本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25
☎047-374-1564

TOKYO SCIENCE CO., LTD.
ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本
地学標本（化石・鉱物・岩石）
古生物関係模型（レプリカ）
大英博物館／恐竜復元模型
●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)
株式会社 東京サイエンス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745
E-mail:science@oak.ocn.ne.jp
since 1974

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース
より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。
株式会社 丹青社
〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡
URL http://www.tanseisha.co.jp

めざすのは
「小宇宙」の実現です。
NOMURA
株式会社 乃村工藝社
本社／東京都港区芝浦4-6-4 〒108-8565 電話03-3455-1171(代)
ホームページ http://www.nomurakougei.co.jp
ディスプレイおよび建築の調査・コンサルティング・
企画・設計・デザイン・プロデュース・演出・制作施工

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO.,LTD.
東京都千代田区神田神保町2-7-3シグマ神保町4階
TEL(03)3221-1102(代)　FAX(03)3221-1185
動物園／水族館／博物館
企画・設計・施工

COLORATA
THE EXPLORATION OF ECOLOGICAL SYSTEMS INC.
COLORATA®
ミュージアムグッズの企画・制作・販売・輸入
カロラータ株式会社
本社・企画室
〒111-0053 東京都台東区浅草橋4-6-8 西澤ビル
TEL.03-3865-8110　FAX.03-3864-4049
営業部・商品管理部
〒136-0072 東京都江東区大島2-13-11
TEL.03-3684-8311　FAX.03-3864-8310

全科協ニュース編集委員会
NHK放送博物館　チーフディレクター　河野光子
滋賀県立琵琶湖博物館　企画調整課長　高橋啓一
ミュージアムパーク茨城県自然史博物館
資料課長　都賀和男
国立科学博物館　普及部　普及課長　佐藤兆昭
国立科学博物館　普及部　普及課専門職　原田紀子

全科協事務局
国立科学博物館普及部普及課　森田　淳　鈴木千絵
Tel.03-5814-9857・9858　Fax.03-5814-9898

発行日　平成13年1月1日
発　行　全国科学博物館協議会©
〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印　刷　島崎印刷株式会社